

“輝け！ひぐみっ子” だより

～東汲沢小学校教育目標「学びあい 高めあい まちとともにあゆむ ひぐみっ子」～

☎861-5531 <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/higashigumisawa/>



子ども自らがパズルのピースを置く学校を目指して

校長 丹羽正昇

いよいよ今年度の最終月に入ります。令和3年度を振り返ると、どのようなものになるでしょうか。教育の世界でよく話されているのは、原点回帰ということです。新型コロナウイルス感染症が、大きく学校教育を変えたのではないかとされていますが、一方では、学校教育の本質が顕在化したとも言われています。この学校教育の本質とは何か。これはもう間違いなく、子どもが主役であるということが第一です。子どものために、子どものためだからなどは、巷でもよく聞く言葉ですが、人によって、その意味はまちまちになることが多いように思われます。

しかし、学校教育においては明確なのです。その本質は何かと学校が問われれば、それは授業(学校行事を含む)による力の育成であるということです。生きる力の育成とも言われています。子どもの学習状況を把握し、指導方法を工夫し、力の育成状況を共有する。各学校には歴史があり、時代のニーズや先を見通しながら、未来社会を創造していく子どもには、どのような力が必要なのかを見極め、学校教育目標にそれらを表します。ひぐみの場合には「学びあい 高めあい まちとともにあゆむ ひぐみっ子」として、皆様にもご理解いただいております。それは、先人たちの知恵と努力と、いまを生きる私たちの知恵と不断の努力があいまって、魅力ある学校が創られていく際の合言葉とも呼べるものです。

この学校教育目標を実現していく過程での力の育成こそが、学校教育の本質であり、教育関係者間での原点回帰です。言い換えれば、子どもの生きる力を育むのが学校であり、それは授業を通して実現されることを、いまさらながら認識しているということです。そうすると、自然と授業の大切さが焦点化されます。いま問われているのは、授業の在り方なのです。授業をつくるのは子どもです。教師が一方向的に押し付けたり、教師の思惑だけでつくられたりした授業を、ひぐみでは授業とは呼びません。仲間と共に何を学びたいのか。どう学びたいのか。学んでどうしたいのか。それらをデザインするのはひぐみっ子です。そんなこと、6年生ならできるけど、1年生にはできないよと仰る方もいらっしゃるかもしれません。できるまでに要する時間は異なると思いますが、どの学年でも必ずできると私は信じています。できると信じる大人がいる限りできる。私はそう考えています。

なんだか、根拠なく言い張っているだけのようですね。根拠は、極めてあいまいです。長年、学校に勤めた者の直感とでも言いましょうか。でも、将棋界のレジェンドである羽生善治さんの言葉が源にはあります。「まずは、どこでもいいから一つ、パズルのピースを置いてみる。それを繰り返していく。そうすると、パズルの全体像がぼんやりとだが捉えられるようになる。」この言葉、まずはやってみないと分からないよという意味以上に、間違っていたとしても、もう一度他のピースを他に置き直せばいいじゃないかという意味合いが強いようです。つまり、物事を探究するには、何度でもやり直せばよいということを忘れてはいけない、何度でもぶれていいんだよということなのです。この何度でもぶれていい、あきらめずに粘り強く問題に向かい合い、とことんやり続けるという意味での「探究していく力」こそが、生きる力です。子どもにルールの上を歩かせるのではなく、自分でルールを敷いて歩いていく子どもに育てたい。そのためにひぐみの教育で大切にしたいことは、保護者や地域の方々と連携・協力し、教育方針の理解を得て、時にはぶれることを恐れず、試行錯誤しながらパズルのピースを子ども自らが置いていく学びをつくることです。それが、自戒の念を込めた私の今年度の振り返りであり、次年度への展望です。

令和3年度も、皆様の温かいエールに感謝いたします。本当にありがとうございました。